# 私の出会った人々（四）

安島　智子

〈はじめに〉

最近、「自閉症児が少なくなった」ということを耳にする。しかし一方、保健所の一歳半検診では「言葉の遅れ」が一番問題になり、教育相談室への幼児の来談主訴も「言葉の遅れ」が最も多い。これは相変わらず、言葉を使いたくなるような気持ちに育っていない幼児が決して少なくないということであろう。こういった子どもたちは、だいたい自閉的傾向とか、情緒障害というカテゴリーで扱われているが、子どもの実際はどんな状態であろうか。私の経験では、関係を極端に閉ざした子供の理解されなさとはまた別な意味で、そうしきれなかった子どもの危うさも、非常に理解されにくい。独得の表現から敏感にその意味することを読みとることが求められると思うが、今回登場するゆうちゃん（仮名）も三歳時に言葉が出なく、自閉的傾向と診断された理解されにくい子どもであった。

〈理解されにくいゆうちゃんのこと〉

（来談動機）

幼稚園の園長先生から、「多動で他の子と遊べず、会話ができない。これまで見てきた自閉症の子とも違うし、本人のしていることが理解できない。どう指導すると良いのか」ということで依頼があった。

（初回のようす）

年長さんとは思えない程体の小さな男の子が、母親に手を引かれておとなしくやってきた。母子別室にしても母親の後を追うこともない。最初に発した言葉は、「やぶいちゃったー」（プレイルームにあった物が一部破けていたのを見て）で、これを繰り返した。自分がしないことでも、自分のせいに思えてしまいそれを強迫的に繰り返す。自他未分化な状態で、自罰的に何かに怯えている感じを受けた。緊張が強く、帽子やかばんを床に置けない。私が「お帽子とかばんを置こうかな」と言うと、あたかもそんな話はなかったように、「マギーヴイヨン」と言う。（マギーヴイヨンは、楽しいイメージ、明るいイメージらしい。）新しい人と新しい場所で、強い不安と緊張の状態にいて、何か起ころうとしていることに強い打ち消しを働かせ、「マギーヴイヨン」イメージに逃げこんだのであろう。

コードの先を持って差し込む場所をあちこち探し回り、「ビリビリするよ」と、その先を身体にくっつけたり、「食べたい」と口に入れたりする。私が「食べたくなっちゃうの？」と言うと、「ばっちいよ」と、繰り返す。そのうちコードがからんでいるのを気にしてほぐそうとし、私に渡してきた。強い緊張がやわらいだようだ。私を心配のない存在と感じ始めたのであろう。それまで身体的距離を置いて、そーっといたのがよかったものと思う。突然、「石、水たまりに投げたよ」と言ったかと思うと、やっと聞きとれる位の小さな声で「汚ない、汚ない」と言う。突然思い出したのであろう。水たまりに石を投げ入れるという行為に対して、どこからか「汚ない」と言う禁止の声がしていたものと思われる。こうしたことにも彼は怯やかされていたに違いない。

次に太鼓を持った。私が木琴のばちでたたき、それを渡したのだが、ゆうちゃんは太鼓は、たたかずゼムクリップをばちの穴に器用に通したのである。この行為も気持ちの現われであろう。そばにいた私に通し終って何か気持ちがすっとしたような感じが伝わってきた。それからひとつしかないブロックを、「二つもあるー」と、それを二か所に置き換えて二つあることにした。この行為も意味深い。時間になるときちっとおかたづけをして、「明日も遊ぶからね」と言った。こうして初回が終わった。

（見立てと治療方針）

初回の活動から、ゆうちゃんは、対人関係における緊張が強く、パニックになると楽しいイメージの中に自己を置く。自他未分化で自罰的で自己破懐的な本人にもよくわからないファンタジーにおびえている。本人自身二者関係のテーマを提示している。母性の供給が受けにくく、自我の成長がしにくい状態にあるということを、この子の状態の特徴として捉えた。治療方針としては、当分の間、身体的距離を置いて母性的エネルギーを供給し、自我を育むことと、内的ファンタジーが充分展開することを目標とした。

（生育歴と家族）

ゆうちゃんは、五歳十一カ月の男児。三歳の時、言葉が出なく、児相で自閉的傾向と言われる。国立リハビリセンターに月一度の割で四、五回通ったことがあるが、効果を感ぜず中断している。半年程前に現在の幼稚園に入園。生後三カ月間、昼夜を問わず泣き続け、あやしても止まらなかった。人工栄養。人見知りはしなかった。歩き始めは十三カ月。つま先立ちで不安定に歩いた。その他の事柄については母親の記憶がはっきりしていない。来談時、祖母（母方）と母親、妹との四人暮しで父親は他県で暮らしている。別居前から生活費をいれないことが続いていた。

―プレイルームでのこと―

［恐怖の身体感覚からの分離・共通感覚・守られ受けとめてもらう］

二回目のセッションでも、コードを持って差し込む所を探している。この行為はゆうちゃんの気持ちがどこかに納まりたい（受けとってもらいたい）気持ちかと、コードの先の部分がどこかに入ると「はいったねー」と応答していたが、「ピリッとくるよ」とは言い続ける。ネオンブライトは画面全体に白を散らばした後、全部はずしてバツだけを入れ、「ばつだよ」と言う。彼の世界の彩のなさと、まさにバツそのものと言うか本人の存在の認められなさを感じた。

三回目では、「ピリッとくるよ」が一層激しくなり、「熱くなって死んじゃうよ」とコードの先を体にくっつける。最後に電話のコードと電気のコードの先をつなぎあわせた。この一連の行為を考えてみると、コードの先は納められたい（受けとってもらいたい）という願いや、恐怖の感覚や、また異なる二つの物をつなげたいという気持ちを現すものであったと思われる。彼が投げてきたネオンブライトを拾ったことは、彼を認めることにもなったであろうか。

四回目に最初にしたことは、電話を箱にしまうことだった。彼にとって危険にさらすことなく、自分をしまえること（守られること）が必要だったものと思う。物を投げては私に拾ってもらうことを声を出して喜び、「ピリッとくるよ」をいよいよ激しく繰り返す。私の体はひどく疲れ、見えない何かに頭の両側が押しつけられるような感じがした。

クライシントの苦しさ、危機感、混乱などを治療者が身を持って受けることがあるが、この身体感覚もその体験だったものと思う。

六回目のことである。コードを出して、コンセントに入れたり出したりしていたが、自分の鼻の穴に差し込んで、「ピリッとくるよ」を言っている。この日は伝わりそうだったので、私は「ピリッとくるのかな。ゆうちゃん恐いのかな」と、身体感覚に感じていた恐怖を言語化

した。これを最後にゆうちゃんは、「ピリッとくるよ」を言わなくなったのだ。「ピリッとくるよ」と表現していた恐怖が、「こわい」という言葉に置きかえられ、何とも言えない身体感覚から分離できたためであろう。つづいてチョークを黒板のチョーク入れに落とし入れ、入るとそれを引き出して中を確認することを繰り返し、私はその都度「入ったねー」と応じ続けた。このやりとりは本人の確かな感じを得ることにつながったらしい。次に、ゆうちゃんはカスタネットをたたき、私は合わせて太鼓をたたいた。初めて、共通感覚を体験することができた。ゆうちゃんのような子はたいてい充分な一体感を体験してきていないが、急に一体感を体験させようとするのは危険なことと思う。その前にこうした共通感覚体験をするのが安全であろう。つづいてゆうちゃんはミニ野菜を籠からひとつずつ取り出し、「なすび」など名前を言いながら私に渡す。私は「なすびだねー」と応えて受けとった。これはミニ野菜を通してゆうちゃん自身を私に受けとって貰う体験でもあった。

[自己中心的物の操作・意志・自分という全体]

七回目では自分の思いどおりに、物を操作する。電話線のつなぎ方を変えてベルを鳴らしたり鳴らさなかったり、電気をつけたり消したり、ブロックをつなげたりはずしたりしていた。また「かさのか」と積木の字を読んだり、私が書いた字の上に同じ字ブロックを置くなど文字遊びを楽しんだ。これまでとは打って変わって、じっくりと座り込んで遊ぶことができた。時間を告げると、「いや」と言った。初めて自分の気持ちを言うことができたなあ。遊ぼうとする意欲を感じた。

九回では、字ブロックを手で高く持ち上げ、字を読んでは、「ぽたっ」と落とす。この「ポタッ」遊びを私はゆうちゃんの声と動きに合わせ、二人の動きは一定のリズムで繰り返された。これは上から下への深さをも感ずる重なり合いでとなった。この遊びは次回、字ブロックの字を読んでは、それを投げて自分で拾いに行くというような、意識の働く行為の延長に広がりを体験し、その

体験を自我に統合する遊びとなっていった。この頃、自分という全体としての体感を感じとることができ始めたように思う。

［エネルギーの貯留と調節］

十一回には、箱の中にいろいろなおもちゃをどんどん入れる。この遊びをしているゆうちゃんの中に混沌としたエネルギーが貯って行くのが感じられた。それからガスレンジ、水中ゲーム、自動販売機を使い、おもちゃの性質にそって操作する。混沌としたエネルギーは、操作を通して物の世界の意味的動きへと変化する。そして電話のスイッチを入れ、ベルをならした。「もしもし」、初めてゆうちゃんが電話をかけてきた。この後ほとんどの時間を自分でコードのもつれをなおすことに使った。次回、箱庭の棚からガソリンスタンドを取り出し、ホースを回して「はいった」と言う。エネルギーが貯留されたのだろう。それからコントロールタワーをぐるぐる動かし、エレベーターも上下に勢いよく動かす。貯留されたエネルギーが動き出すと、それがまた不安となる。ガスコンロを見て「爆発するよ」と言う。私が「調節するところはどこかな」と言うと安心したようだった。ゆうちゃんの危機感は調節という手段で解決ができたのであろう。初めてゆうちゃんが私に寄りかかってきた。

［構造への関心］

十二回には、ネオンブライトの器具を分解して、「テレビみたい」、「電気はずれるよ」などと、構造を確かめたり、分解した物を元に戻す遊びが続いた。私はゆうちゃんが戻せるだけ分解するようにと心がけていた。分解しては、組みたてる。この頃から、プラレールを始めた。プラレールをどんどんつなぎ、その先を「はじまり」と言う。確かにつなげている先は、いつも始まりである。時間になって本人がおかたづけをしようとしたのを、「このままでいいよ」と言うと、「安島先生がおかたづけしてくれるの？」と尋ねた。状況が見えてきていることや、私との関係もしっかりしてきたことが感じられ

た。

―場面遊び・うんちとおしっこ・自分でする―

二十回に、床の上に救急車を置いて「ぴーぽーぴーぽー」言いながら走らせたり、買物籠を持って、欲しいものを籠の中に入れる。

二十一回には、コントロールタワーにこわれた自動車を載せてぐるぐるまわし、上に着くと、「着きましたよー」と言ったり、下には木を並べ木の側を救急車を走らせた。救急車は強力な応援車に違いない。そしてこの日はおうちセットの二階にトイレを置いた。「二階のトイレ」と説明した。こえだちゃん人形を階段一段ずつ、トコトコと進ませてトイレに乗せる。そして「おしっこしゃー」と言ってから、「大はうんち、小はおしっこ」を繰り返し、これを二人で合唱した。こえだちゃんはまた、トコトコと下に降り、庭には箱庭の棚から小鳥や木が置かれた。

二十三回には自分でプレイルームの電気のスイッチをつけたり、ドアを開けて入室した。自分でする、自分がしたいという気持ちになってきたらしい。またこの日は幼稚園でのことを尋ねもしないのに話してきた。「幼稚園のトイレにおもちゃ捨てたの」。私は「それで先生に言ったの？」と尋ねると、「まだ」と応える。幼稚園の先生には秘密にしておくことだったのかもしれない。自分からこんな話をしてきたり、こういう会話ができるようになったのだなあと感無量だった。

―象徴遊びとからだ遊び―

ある日、字ブロックをまあるくつなげた。「赤、女の子。青、男の子。草色、春の子。黄色、秋の子……」と言いながら、ひとつひとつつなげた。ゆうちゃんの心の中に住む人々をつなげつつ、彼自身の全き性を実現していったのであろうか。この頃はまた、ゆうちゃんの心境をトランプに託して使い、人形でトランプを噛んでは、「死んじゃった」、魚釣りのように釣りあげては、「釣っちゃった」を繰り返した。幾度も殺し幾度も水の生命を

釣りあげる必要性があったのであろう。さらにトランプは投げつけられたり、踏んづけられたり、ゆうちゃんの攻撃性をむける対象にもなったのである。またゆうちゃんは私がたたく木琴のうえに足を乗せてきて、リズムにあわせて足を出したり引っこめたりした。身体を使ったリズム遊びとなり、初めてゆうちゃんを抱いた。ここまできてやっと抱いても大丈夫と思えたのである。バチがひとつ足りなかった。私が「どうしたのかな」と言うと、彼は「おじさんが……」とそうかもしれない人のことを言って、もう自分がやったとは思わない。

次の回、ゆうちゃんはエネルギッシュだった。トランプを部屋のあちこちになげつける。私は、ゆうちゃんがトランプを投げ広げると抱き上げて、グルグル回しをした。外へ拡散するエネルギーを遠心力で内へ向け、エネルギーの求心化をねらいとしたわけであるが、実際、ゆうちゃんは、「キャー、キャー」と声をあげて喜ぶ。これを幾度も繰り返した。そして一段落したとき、彼はエースのカードを二枚箱庭の砂の中に埋めた。一つはゆうちゃん、一つは私であろうか。全き一なるものが土の中から生まれ出て来るようなそんな感じがした。ゆうちゃんの2のテーマはここで解決されようとしていたものとも考えられる。

［静かに絵本を見る］

ゆうちゃんのプレイルームでの遊びはとても静かで、ゆったりするようになった。私に甘えてよりかかってきたり、特にいっしょに絵本を見るのが好きになった。最初に好きになったのは、松谷みよ子さんの「いないいないばあ」である。何度見てもケタケタと声をあげて喜ぶ。二人で声をそろえて「いないいない　ばあ」とページをめくるのがとても楽しく、ゆうちゃんはやっと安心して赤ちゃんの心でいることができるようになったのかとも思う。だんだんいろいろな本を見るようになり、お別れの頃に好きになったのは「親指姫」の絵本だった。ゆうちゃんは親指姫をとってもかわいく思うようだった。「親指姫かわいい」と言い、また妹のことも「えみ

ちゃんかわいい」と言う。ゆうちゃんもお兄さんになったようだ。

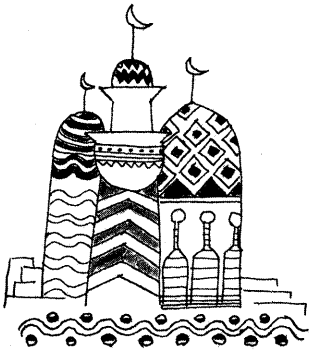
こうして一〇カ月がたち、ゆうちゃんは人とお話をしたい気持ちが育ち、他の人にもゆうちゃんのことは理解しやすくなった。しかし、同年齢の子どもといっしょに生活するには、自我の力はまだまだ弱く傷つきやすい。情緒障害学級の援助を希望し、普通学級に入学することにした。

（このはな児童学研究所）

# 「お店やごっこ」実践の史的考察

## ――昭和前期の「生活」への着眼による実践を中心にして――

師岡　章



〔はじめに〕

今日、保育現場の大半でなされている〝お店やごっこ〟実践は、その捉え方によって様々な扱われ方をされている。

例えば、園児獲得のための目玉保育や早期教育・能力主義などの発想と結びつく中では、親向けの製作展的な見栄え中心の実践が展開されていたり、一方で、保育の中心に子どもをおき、主体的に活動に取り組む実践を展